# 読売 俳壇

## 高野ムツオ 選

消ゆる自由おもふがままにシャボン玉
大和市　おおもりじゅん子

【評】シャボン玉の消え方をどう受け取るか。それは人それぞれ。性別、境遇、その時々によっても異なる。「消ゆる自由」に羨望を抱くのは作者の年齢の深まりゆえ。

ブランコの揺れを残して子ら帰る
大和市　稲泉美代子

【評】公園の一場面だろう。賑やかな子供達の声が消えたのちも風に揺れ続けているブランコ。もっと遊ぼうと訴えているかのようだ。

夏蝶の羽撃く前の空静か
千葉県　笹生　君雄

【評】揚羽蝶に違いない。飛び立つと同時に呼応するように空までも羽ばたき出したのだ。静から動へ、そのダイナミックな転換が見事。

海風の抜ける駅舎に燕の子
横浜市　小林　敏和

何もかも映すみずうみ更衣
芦屋市　田中　俊

麦の禾見てゐるうちに痒くなる
町田市　枝沢　聖文

特急も鈍行もみな窓青葉
白井市　毘舎利道弘

こどもの日子供でゐたい母ゐれば
埼玉県　浜名　勇

もう次の枝を見てゐる袋掛
大阪市　今井　文雄

凱旋のごとく掲げて捕虫網
神奈川県　中島やさか

## 正木ゆう子 選

滝となり産まれ落ち黒馬の湯気
市川市　吉住　威典

【評】五・五のリズムで畳みかける動詞の緊迫感が、産まれたての仔馬の存在を際立てている。「滝」という力強い比喩や、「黒」「湯気」の具体性も視覚に訴えて、臨場感あり。

男名の薔薇も愛して九十に
鳥取県　表　いさお

【評】高齢と薔薇の取り合わせだけなら珍しくないのに、「男名」の一語で一挙に怪しく謎めいた人物が想像される。高齢なればこその香気。

寒天はさいの目に蜜たっぷりと
福山市　金尾　洵子

【評】食べ物の句は、読んだ人が食べたくなれば、それで成功。「さいの目」がいい。透き通った断面と、とんがった角々が目に浮かぶ。

薇の取ってやりたき綿毛かな
防府市　光井加代子

アネモネてふ眠たささそふ花の名よ
東京都　杉中　元敏

犬の寝言に返事してやるおぼろ月
高槻市　村松　譲

子規の選受けてもみたき虚子忌かな
東海市　斉藤　浩美

口々に風のことだけ言ひ五月
福岡県　松養　花子

海光の張りつく海蘿掻きにけり
仙台市　佐藤　庄陸

筍を掘りに行くぞと湯を沸かす
高槻市　平山　良志

## 小池 光 選

京都から三重県津から近所から届く筍の竹取物語
町田市　永井　悦子

【評】遠くの友人、知人からことしもタケノコが届く。そのよろこびを詠って、結句の「竹取物語」への展開が意外性あっておもしろい。

## 栗木 京子 選

山の畑「天国みたい」と大声の祖母と二人の花吹雪受く
奈良市　甲斐田　祥

【評】祥さんは十五歳。少女に戻ったような祖母の姿がほほえましい。「二人で」でなく「二人の」と表したことで、二人だけの花吹

## 小澤 實 選

初夏の顔をならべてウェブ会議
津市　渡辺　健治

【評】パソコンの画面上に顔を並べてウェブ会議を行っているのであるが、その顔々が初夏のものだったというのだ。どこかすがすがしく、新しい季節を迎えている感じがある。

子子のゐさうな水にゐたりける
川崎市　折戸　洋

【評】子子がいそうな溜り水があった、かがんで水中を覗いてみると子子が活動していた。句の奥に主人公の動作の変化まで見える。

峡の暮岩魚一閃したりけり
柏市　小畑　昌司

【評】峡も暮れてきた、水面から岩魚が跳ね上がり、夕日にきらめいた。この句の主人公は、渓流釣りで岩魚を釣り上げたかったのかも。

さえずりや濾紙にふくらむコーヒー粉
大津市　武田　和雄

ずぬずぬと冷し中華へマヨネーズ
小諸市　藤　雪陽

啖呵切る懐かしき声六輔忌
相模原市　はやし　央

山盛りのネギに七味やどぜう鍋
千葉市　石野　勤

掘りたての筍どかと置かれけり
越谷市　新井高四郎

薫風やバゲット薄く斜に切る
静岡市　山本　正幸

寝て鳴いて子猫の爪のしっかりと
宇都宮市　津布久　勇

## 津川絵理子 選

風薫るスクールバスの停まる楡
東京都　天地わたる

【評】バス停の標識はあるのだろう。でも大きな楡の木が目印になっているのだ。楡の木を渡る風や、バスに乗りこむ子供たちの姿が見えるよう。清々しく、童話的な光景だ。

葉桜の枝に御籤の凶の文字
渋川市　星野　芳美

【評】葉桜の枝に白い御籤は目立つ。近づくと、御籤に凶の文字が透けて見えた。途端に胸が騒めいて、美しい葉桜が禍々しく見えてくる。

香水の空き瓶五本全部違ふ
さいたま市　与語　十一

【評】香水瓶はどれも個性的で美しい。五本使い終わるまでに、何年経ったのだろう。全部違う瓶を並べて、過ぎ去った月日に思いを馳せる。

句の話尽きぬ人なり桜の実
西宮市　平田　あい

青蔦や時計止まりしモリス館
東村山市　副島　健

少女等のソックス白き聖五月
総社市　風早　貞夫

どことなく似たる人生修司の忌
高砂市　池田喜代持

朧の夜拾つて違ふ僕の鍵
塩尻市　神戸　千寛

歯磨き粉買ひに行く道花茨
三原市　天崎　千寿

資生堂パーラーに夏来てをりぬ
埼玉県　小町　季生

## 俵 万智 選

お互いが譲ってできた空間に窓から差した光が座る
東京都　吉田　敦史

【評】待合室かバスか電車か……。相手を思いやる気持ちが交差した結果、ちょっと気まずいような空席が生まれた。そこにちゃっか

## 黒瀬 珂瀾 選

作業着のZIPじゃりりと引きあげて十八時まで歯車になる
高島市　くらたか湖春

【評】現場仕事に入る情景でしょう。これから定時まで無心になって働かねばならない。でも、ジッパーを引きあげるさまはとっても

がな）、電話番号を明記。
蔵前郵便局留、読売歌（俳）
彩絵ははなしょうぶ

## 短歌あれこれ　川本千栄（歌人）

### 雑草ではなく

春、プランター一面にパセリの種を蒔いたら、びっしりカタバミの芽が出て来た。こんなの蒔いたっけ？と思っていると、後からちょっと違う芽が出て来て、こちらがパセリらしい。邪魔なカタバミを抜こうとすると、葉だけプチッと切れて根は抜けない。この根がなかなか厄介だ。他の鉢の古いカタバミを引くと、植木鉢の土全部が持ち上るぐらい根が張っている。

私の短歌の先生だった河野裕子は病が重くなった時、土に根ざした、こういう強い草たちに力をもらっていたようだ。

生きるのは大大変と屈まればさうさなあとかたばみの花
河野裕子

足もとのたんぽぽたちは健やかだ　どうつてこと無いよなあ、ほんと
同

草たちの声は、河野の声でありながら、たしかに草の中から聞こえて来て自身を励ましている。河野にとっては雑草なんかではなかったのだ。

題字デザイン・イラスト　福田美蘭